

婦人と子ども



慎教鏡といふ書物をよみて

此夏、暫く豆州の山間に微癩を養うて居つた徒然の折、隣室の客から借り得た書物の中に、家内和合慎教鏡と題する一書があつた。慎話會主三輪觀勝といふ人の著述で、標題の示す通り、慎といふことを基にして、家族的實踐道徳談を極めて卑近に記されたものである。其中の面白いと感じられたものを左に引いて見よう。家庭教育の目的論や、スキート、ホームの理想談に腦漿を費さるゝ方々に取りても、多少、頭休めの材料ともならうかと思つて、

物知らず一覽

天皇陛下てんのうへいかのわりがたき御恩おんを知らず。

今有いまつて後あとなき命いのちを知らず

四海かいに福祿ふくろくのある事ことを知らず

人は一代名だいなは末代まつだいといふ事ことをしらず

火水ひみづとかいて神かみといふ事ことをしらず

主人しゆじんや親おやに大恩たいおんある事ことをしらず

信心しんぎんはまことの心こころといふ事ことをしらず

我身わがみは借りものといふ事ことをしらず

正直しやうじきに徳とくのある事ことをしらず

うそをつけば心こころの痛いたむといふ事ことをしらず

何事なにごとも我われにあるといふ事ことをしらず

人の非ひを咎とがめて徳とくのなき事ことをしらず

心こころにむらば血ちもにむるといふ事ことをしらず

ふばけは人の心こころに在あるといふ事ことをしらず

神明しんめいの有ありがたき御恩おんを知らず

日月につげつの廣大こうだいの徳とくを知らず

財さいはくちても誠まことはくちぬといふ事ことをしらず

心の善惡ぜんあくは必ずかならずはへるといふ事ことをしらず

神かみのおかげで生いきて居ゐる事ことをしらず

衆人しゆじん他人たにんに恩おんある事ことをしらず

無理むりの願ねがひは叶かなはぬといふ事ことをしらず

知惠ちゑでは富貴ふうきになれぬといふ事ことをしらず

病根びやうこんは氣きぐせのこりといふ事ことをしらず

懺悔ざんげして跡腹あとはらのよき事ことをしらず

人をにくめば我われもにくまるといふ事ことをしらず

心程こころほど尊たうときものは非あらずといふ事ことをしらず

いかり短氣たんきに徳とくのなき事ことをしらず

鬼おにと地獄ぢごくは心の内こころうちといふ事ことをしらず

りんしよくは畜生道に入るといふ事をしらす

大へいは悪げなものとていふ事をしらす

まけん氣の強きは運を敗るといふ事をしらす

みえとかざりは壽命を縮るといふ事をしらす

自然にまかせて徳のある事をしらす

わるちえは我身を敗るといふ事をしらす

人の嫌ふはいつこくものといふ事をしらす

目先の慾は後の害になるといふ事をしらす

玉磨かざれば光りなき事をしらす

之に附加したく思ふのは

理屈ばかり知つて行ふことを知らず、所謂、論語讀みの論語知らず。次に

こそ

といふ字の使ひ方を面白く解釋して

(前略)また、この二字を向ふの人につけて見るべし。是を何れも己れにつける時には、我なればこ

そおまへさんの様なる腹立やを亭主にして居るなり、なか／＼よそのおかみさんでは辛抱をするもの

へんくつ片いちちは愛敬なき事をしらす

大食と朝寐は損といふ事をしらす

ねたみそねみは罪といふ事をしらす

頭痛は愚痴の考から起るといふ事をしらす

氣をもんでは成就せざるといふ事をしらす

自分勝手は損の種まきといふ事をしらす

人の心は鏡といふ事をしらす

大慾は形の外といふ事をしらす

教を聞くは人に勝れたる徳といふ事をしらす

かと女房いばるなり。また亭主は我なればこそてまへの様な愚痴たら〜の者をも女房にするなれといばるなり。我の方へこのこそをつける故世の中は治まらず。(中略) このこそも己につけるはまんしんなり。世に高慢ほどにくげなものはなし、歌に「このこそを向ふにつけて我れなしに至らぬ我をしるぞ慎身

とある、頗る面白いが然し、之も見方一つで、こそを自分につけて「我が徳が至らねばこそ我を恨むのだらう」我が智が至らねばこそ此過を仕出かしたのだらう」といふ風に考へるのも亦必要だと思ふ。一體このこそといふ辭は、特別に之ぞと取り立て、云ふ意味があるのだから、自分を善いと考へて自分の方へつける、此書物にある通り、「吾こそ」「吾なればこそ」などいつて、頗る高慢に聞えるのだが、自分を悪く見て附けると、一層謙遜した意味になると思ふ。

夫から、左の二通りの道歌は、各自暗誦して、心に銘する時は常に家内の平和、交際の圓滿、實行の篤實の好指針となると思ふ。

### 活物の道歌

和合の家 慎しめば世界に敵は更になし皆身内ぞと人も喜ぶ  
不和合の家 慎しめぬ家は身内も敵となり心の地獄落て苦しむ  
金持貧乏 金銀を積と雖ども強慾は心ろ苦しく是れぞ貧乏

貧乏の長者 貧乏をしても歡ぶ心ろには福祿壽命宿るなりけり

亭主の心得 女房は嬉しきものと喜こべば是れ一生の守り本尊

女房の心得 御亭主は實に大切と崇めれば運も盛んに昇る幸福

夫婦和合 女房はお客と思ひ御亭主は國君殿と思ひくらせば

寶船 目の覺て機嫌の能が寶船日々より給ひ夫婦中よく

七福人 喜ぶと不足も留主でふくが來る夫婦喜ぶ内は福々

程 心得て心得ちがひする心まこと心になれよ一心

慎に人々先は 慎みて己れ一人を慎めはひとり種で天地一ぱい

そしるとも 人様が何といふとも夫はそれ人に構はず慎むぞ人

恩人 己が非を譏る人こそ有難や運をなすは是が妙藥

貧福 和合して樂む家ぞ福多し福がいやならいつもむしやくしや

短氣は損氣 強い氣は我身の敵と知れたなら我を遜り人を敬へ

積金 日に一つ慎み守る人ならば月に三十よき事ぞます

三善 口一つ心に一つ身に一つ日々に三つを守りてや見ん

繁榮の元 不景氣は己れで造る胸の非と我が非を知らばいつも繁昌

聞て吃驚り 一日に五錢の錢をつむ時は壹年經ば十八圓となる

天恩人の寶 修行とは智慧やか金は入らぬもの息の御徳を知るぞ慎しめ

神信心 願ふ事あらば御託を先とせよそれから願へ諸願成就を

足事を知る 衣食住不自由なき身の人よりも心に不足なきぞ尊とき

信心の徳 愚痴不足いはぬ御方が信心のよろこびえたる神の御利益

人は小天地 天理我體文字が讀たら世の中は日々樂しみに今日も朝から

慎 慎は心靜に身をかるく我が行のよしあしを知れ

つゝしみのばやりうた

一ツトセ 人のいやがる我儘を直す其身がたからなり。こりやつゝしみぢや

二ツトセ 夫婦喜ぶ御家には子孫かゝやくしるしなり。こりやつゝしみぢや

三ツトセ みてもさいても慎みは何につけてもくすりなり。こりやつゝしみぢや

四ツトセ 四方の御方に譽られて此よあのよとたのしめよ。こりやつゝしみぢや

五ツトセ いつも心のくらやみを慎みひらけば明とくじや。こりやつゝしみぢや

六ツトセ むかつぱらから喧嘩する是は心のたらぬゆえ。こりやつゝしみぢや

七ツトセ なま物じりては耻をかくしらぬと正直懺悔せよ。こりやつゝしみぢや

- 八ツトセ 役にもたぬと越をしてはねられぬ老のくせ。こりやつゝしみぢや
- 九ツトセ 心ひとつを慎めば其身そのまゝ神はとけ。こりやつゝしみぢや
- 十トセ とても行かれぬ極樂も唯今こゝにとわらはれる。こりやつゝしみぢや
- 十一トセ 一に慎しみ二にかせぎ三に忠義とかうこうせよ。こりやつゝしみぢや
- 十二トセ 憎ひか愛はいろはなり習へばあがるぞ慎しめよ。こりやつゝしみぢや
- 十三トセ さんだん苦勞は入らぬ者無我となるのが目當なり。こりやつゝしみぢや
- 十五トセ 極樂世界はいづくなる慎むかはらの中にある。こりやつゝしみぢや
- 十六トセ 六根清淨の人となり心は神ぞとわがめみよ。こりやつゝしみぢや
- 十七トセ 七なんへんじて七ふくとなるも慎しむ人にある。こりやつゝしみぢや
- 十八トセ 八方ふさがり今はきえ十方世界がわが物ぢや。こりやつゝしみぢや
- 十九トセ くにも天下もつゝしみで恩をほうじる人となる。こりやつゝしみぢや
- 二十トセ はたから笑ふもかまやせぬ我は一心慎しみぢや。こりやつゝしみぢや
- 廿一トセ いちくこたへる慎みも行ひなければ益はない。こりやつゝしみぢや
- 廿二トセ 二度と出られぬ世の中で慎む人こそめでたけれ。こりやつゝしみぢや
- 廿三トセ さんざはたらきその上は心の樂こそ開運か。こりやつゝしみぢや

廿四トセ 死ぬも活るも我にゐる是がしれねば氣の毒ぢや。こりやつゝしみぢや

廿五トセ 五あく十あくすてゝみよ十せん保つの人となる。こりやつゝしみぢや

どうか、お互に、か様なうたを暗誦したいものと思ふ。

終りに、慎話丸の効能一覽繪が出て居る、繪は略して、其功能書といふのは、實に左の通り

### 慎話丸

#### ● 功 能

一、夫婦中惡敷離別病によし  
一、親子中惡敷喧嘩するによし

一、人を讒り又は憎み腹立によし  
一、取越苦勞にて寝られぬによし

一、吞すぎ食すぎ胃病によし  
一、上を見て氣ばかりのぼるによし

一、高慢にて人を見下す眼病によし  
一、亭主を尻に敷女房の病によし

一、子宮病一切子の出来ぬ婦人に別而妙なり

用法、丸呑は効能うすし能々かみしめて朝夕服用すべしいかなる難病又は慢心病にても全治保證なり

常に陽氣を以て行ふ時は其功尤も多し陰氣は其功薄し併し邪陽は其身に害至るものと知るべし云々

(杖 羊)